

# かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)

電話 66-1311  
FAX 66-1314



## 恵陽分教会

大正14年2月24日 設立  
昭和38年5月12日 鎮座祭  
昭和38年5月13日 奉告祭

本年の活動目標

## 「おぢぼがえり」

- ・「喜びいっぱいのおたすけ」を目指し、さあ、おぢぼに帰ろう。
- ・「人だすけのおぢぼがえり」を通して、ぢぼ一つに心を寄せよう。

立教185年  
3月号

## 学生層育成者講習会 オンラインで開催 学生担当 委員会

大教会笠岡学生担当委員会は、2月21日、「学生層育成者講習会」を開催し、75人が受講した。

今回の講習会は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のうえから、オンラインで開催した。講師の小西祥治先生(本部学生担当委員会委員・都大会長)が、東京の都大教会より、オンラインにて学生の育成にあたる心構えを、自身の体験談を交えてお話しくださった。講話内容は次の通り。

日々は、学生層育成のうえにお心寄せいただき、誠にありがとうございます。

本日は、学生層育成者講習会を開催いただき、東京の練馬区にある「都大教会」からリモートにて努めます。笠岡大教会まで70キロ離れていても、こうして皆様にお話しすることができ、とても便利な時代になったと感じる一方で、こういう道具に振り回されないように、慎重に努めたいと思います。

どうぞよろしくお願いします。

学生担当委員会では、「共に教祖のようばくに育つ」という基本方針の下、「日常の丹精の継続」・「おちばや教会につながる活動の推進」という2点の重点活動項目を挙げて、活動を進めています。

1点目の「日常の丹精の継続」については、一昨年からコロナ禍の中、行事が幾度となく中止となつてしまいました。現在も活動自体を制限せざるを得ない状況にあります。

学担では、この機会に、今までの活動を振り返り、練り合いを重ねました。よくよく考えてみると、主に学生への「丹精」という点において、おおよそ「行事に頼っていたのではないか」という考えに至りました。

そこで、過去の学生担当者大会において、学生担当者や育成者に向けて頂戴した真柱様のお言葉から、育成者としての「役割」をあらためて確認すると、「学生会の活動を支援する」ということと「道の将来を担う学生が、世界だすけのようばくとして成人するための世話取りをする」ということでした。

学担としては、日常における丹精の大切さを十分に理解したうえで、日々心がけながらも、行事の内容の充実にしつかりと努めようというような話し合いになりました。

さて、現在、「丹精」をテーマに、あちこちでいろいろな話がなされています。「丹精」には、「真心を込めて育てる」・「熱を入れて育てる」という意味があります。

ここで「育てる」をインターネットで検索すると、「育てる」ことに関しての様々な手法や手段、いわゆるハウ・ツーがいとも簡単に出てきます。しかし、それらをテクニクとして参考にすることがあったとしても、それで、「道の育成」が完結するというようなことにはなりません。

私たちは、教祖のようばくですから、やはり「私たちの育成・丹精」は、「教祖が人々に対して、いかに声を掛けられ、心にかけれられ、振る舞われたか」を自ら求め学んで、実践に移すことが大切で、それが、ひながたを辿る基本的な姿勢だと思えます。

私が所属する学担の「担当者活動部」

では、「教祖のひながたに学ぶ人材育成」をテーマに頻繁に練り合いを重ね、その練り合いが形になって、「育成ミ二勉強会」というものを開催するまでになりました。

今日は、このチームで普段から練り合っている教祖の逸話篇を引用して、私自身の話も交えながら話を進めたいと思います。

逸話篇に「45・心の皺を」というお話があります(本文別掲)。

この逸話篇を読んで私の心に残ったのは、「人のたすけもこの理やで。心の皺を、話の理で伸ばしてやるのやで。」というところと、「そこを、落とさずに救けるが、この道の理やで」というところでした。

自身の大学時代を振り返ってみると、恥ずかしながら、お道に対して斜に構え、箸にも棒にもかからないような日々を過ごしていました。夜間大学でしたので、昼間はバイト、夜は大学、終わってからは、ロックバンドでドラムを叩いていました。教会に生まれ育ちながらも、親の声など耳にもせず、教会にはなかなか帰らず、神様から遠く遠く離れていました。



中段に設置されたスクリーン越しに  
リモートでお話しされる小西先生

大学1年の秋頃の話ですが、授業中に青年会の分会委員長さんから電話がかかって、「今晚、新宿で美味しい焼きに連れて行ってやる。9時半に改札で待っているから、乗り換えしないで出口で出てこい」と言われました。私は、半ば困惑しながら、いきなりなこの強引な誘いに「分かりました」と言って電話を切りました。

帰りには必ず新宿を通りますので、言われたとおりに改札を通ろうとすると、分会の委員長さんがそこにおられました。なぜかハッピーにネクタイ、帯を締めて立っておられ、小田急の出口

でもと目立っていました。私が「急にどうしたんだろう」と思いながら挨拶すると、おもむろにハッピーを渡してきました。なんと、その日は分会の夜の、をいがけの日でした。そのときの私の服装は、「半パンにTシャツ、ニットキャップをかぶって、頭は金髪、耳には大きなボディピアス」でした。そんな私に「これ読め。このページでいいからこの部分。」と言われ、わけが分からないまま、人生初の路傍講演をすることになりました。

その後、居酒屋へ連れて行ってくれ、「お前も早く仲間に入ってこい」と半ば説教のような感じで思いを聞かせてもらいました。

当時、お道に対していろいろと背を向けていた私にとって、鮮烈な記憶として頭の中に残っています。心に皺が寄り始めていた私にとって、一つの「きっかけ」になったのは間違いありません。

次のお話は「高う買って」です。このお話は、逸話篇に2つあります(104・信心はな、165・高う買って、**本文別掲**)。どちらのお話に出てくる先人も、教祖からお話を聞かれて、「高う買って、

安う売る」というお言葉がどうしても耳に残るというお話です。

2つのお話は、商売人に対して、「物を仕入れて、物を売る」という行為だけではなく、「少しでも高く買って、少しでも安く売る、そうすることで関係する方々に喜んでもらえるようにつとめるのが大切だ」というお話だと思います。

私は、「高う買って、安う売る」のは、「物」だけではなくて、自分や人の「心遣い・言葉遣い・行い」も当てはまるとも考えます。

私は、前述の分会委員長さんに誘われたに、をいがけの一件から、その後もあまり変わることができずにいました。その後、大学2年のとき、都の学担の先生から電話がかかって、「今近くを通ったんだけど、ちよつとコーヒーでも飲まないか」と言われました。私は、前回のこともあったので、「ちよつと予定があつて」と断つてしまいました。また、電話がかかってきて、「いま、たまたま大学の近くに

いるんだけど、お前飯食べたか？」と聞かれ、「まだです」と言うと、「じゃあ食おうか」と言われ、車で大学まで迎えに来てくれました。車中では、とても私のことを気遣ってくれました。食事の時は、前回のように半ば説教のような感じでしたが、いろいろと気遣いながらお話をしてくれました。

私は、この学担の先生がご自身の行動や心遣いを、安く売ってくれたからこそ、私自身は買うことができたのだと思います。

これがもしも「お前のために時間を割いて、教会にも家庭にもしんどいなかを都合をつけて、遠いところまでわざわざ車走らせて来たんだよ」と、高くドンと出されたら、私は買えなかつたかもしれません。ご飯へ行く車中でも、「いきなりで悪かつたなあ」「大学遅くまで大変だなあ」「会えてうれしいわ」と、高く買ってくれたからこそ、自分の心を開くことができたのではないかと思います。

後から知ったことですが、学担や青年会の中で、「あいつどうにかしないといけない」「あのままだったらこの先どうなるか分からん」「ここで話しているも埒があかないから、とにかく行動を起こしていこう」と、私のネガティブなことが、いつも話題に挙がっていたそうです。

次の逸話篇は、「146・御苦勞さん」というお話です(本文別掲)。

担当者活動部では、教祖の話をするときに、「教祖だからできた」・「教祖だからこういう結果になった」というようなことをなるべく言わないようにしています。

「ひと言の、をいかけがその人の運命を変える」とよく言われますが、このときに教祖は一体どのような声色で「御苦勞さん」と声を掛けられたのでしょうか。——きつと、温かい神々しいお声だったのかなと思います。

現在、私は、東京教区学担委員長と、東京教区内の大学生の寮「さんさい寮」の寮長を務めています。東京教区の学生、さんさい寮生と関わる機会が数多くあります。

そんな機会に、学生たちに「あなたたちは大人からどんな声を掛けてもらったらうれしいか」・「どんな言葉を掛けてもらったら勇むか」と聞くと、いろいろな答えが返ってきます。

1つ目は、「いつもありがとう」・「どうもおつかれさま」・「よく来たね」・「よくやってくれたね」・「会えてうれしいよ」というような感謝の言葉がとてもうれしかったと言います。

2つ目、これが圧倒的に多いのですが、「自分の変化に気づいて声を掛けてくれること」——「お、最近髪型変わったね」・「今日は何だか浮かない顔してるね、どうしたの」・「あれ、そんな携帯使ってたっけ」——いつも見ている霧囲気で声を掛けられるとうれしいという学生がとても多い。

また、「こんな声を掛けられてうれしかった」で、こんな話があります。数年前に、関東ブロックが企画する「ワーク&トーク」(大学生の育成行事)が東京教区で開催され、学生から、プログラムの中で「天理教Q&A」がしたいと提案してきました。

その時間は90分間。質問には学担が答えますが、学生からさまざまな質問が飛んできました。素晴らしかったのは、「答えが一つではない質問」をどんどんしてきたことでした。

それに対して、「私ならこうする」・「私ならきつとこう思う」というような正確な答えはなかなか出せませんが、学担の委員が答える側に回って、質問に対して答えました。

この時間の終盤に、「なるほどの人になれますか」という質問が出てきました。そういう質問をする学生がいること自体が素晴らしいと思いますが、それに対して、ある真面目な学担の先生が、「うーん、どうだろうな、難しいかな。私自身は到底なれるとは思えないけどな、難しいな」というような答えを出されました。

質問した学生は、何だかもやもやした感じでその時間を終えたようでした。その学生は東京教区の子で、私もどうしても気になったので、駆け寄って話をしました。

その学生は、「あのときに『大丈夫、きつとなれる。お互いに勇んで頑張ろうよ』と自信を持って言ってもらえたかった」とのことでした。『大丈夫だよ、頑張っていこうよ』と、自信を持って声を掛けてもらいたかった」というふうに伝えられました。

相手を氣遣って言ったことが、逆に相手を不安にさせてしまうこともある。自信を持って伝えることが、伝える側が安心できる材料になるのではないかと思います。

おさしづに「世界から見ればやっぱり」とあるように、若年層の育成は、

なかなか取り組めない、取り組んでもわずかな成果しかない、途中で問題が起きたり、また、続けることも大変だと感じるときもあるでしょう。——そんなとき、私は、「だからお道はありがたいなあ」・「何でもお道はありがたいなあ」と思います。

なぜ、このように思うようになったかと言いますと、実は、数年前、祖父の資料を整理していたときに、数枚のメモが目にとまりました。そのメモの内容は昭和30年頃のものでした。

当時の都大教会は、ある事情で、現在の練馬の地へ越してきましたが、本当に何も無い時代で、客間はおろか、満足に人を受け入れることができないような状況でした。

そこへ世話人先生が御巡教に來られることになりました。世話人先生とは、笠岡大教会3代会長・上原繁雄先生だったのです。

当時、30代中頃の祖父は、何とか受け入れをしなければと、駆けずり回って準備したそうです。メモには、「裸電球一つ灯りを灯すのがやっとだった」と書いてありました。

御巡教を終え、上原先生に接待の非礼をお詫びしようと思った祖父として

は、不備も多々あり、種々、ご迷惑をお掛けしたことのお叱りを受けるかと思っていました。そのときにどんな言葉が返ってきたか——「小西さん、何でもお道はありがたいですなあ。今日は小西さんとこれだけお話をさせていただきますよ。」と、大変な親心をかけてくださった。

祖父のメモには、このように「上原先生から言っていたので、ボロボロと涙がこぼれた」と書いてありました。

学生層の育成は、やろうと思ってもなかなか難しいことですが、どのような結果になっても、何でもありがたいな、結構だなど思っているところに、神様にお受け取りいただく「こと」があるのではないかと思います。

この時だけでなく、学生の心の変化・言葉の変化・行動の変化に気付いて、自信を持って声を掛ける、まさに「日常の丹精」というような育成者側の積み重ね、繰り返し(＝継続)が、心の皺を伸ばすことになって、「そこを、落とさずに救える」ことにつながると思っています。

来月に入ると、学生生徒修養会大学の部が始まります。今回は第1回・第2回と別れています。このとても素晴らしいおちばでの修養会に、育成者の皆様の「日常の丹精」が加われれば、より輝きを増すことは間違いないと思います。

どうかこれからも、学生会の育成・学生層の育成に積極的に心寄せいただきますようお願いいたします。

【講話に引用された逸話篇】

四五 心の皺を

教祖は、一枚の紙も、反故やからとて粗末になさらず、おひねりの紙なども、丁寧に皺を伸ばして、座布団の下に敷いて、御用にお使いなされた。お話しに、

「皺だらけになった紙を、そのまま置けば、落とし紙か鼻紙にするより仕様ないで。これを丁寧に皺を伸ばして置いたなら、何んなりとも使われる。落とし紙や鼻紙になったら、もう一度引き上げるとは出来ぬやろ。」

人のたすけもこの理やで。心の皺を、話の理で伸ばしてやるのやで。心も、皺だらけになったら、落とし紙のようなものやろ。そこを、落とさずに救けるが、この道の理やで。」

と、お聞かせ下された。

ある時、増井りんが、お側に来て、「お手許のおふで書きを写さして頂きたい。」とお願ひすると、

「紙があるかえ。」  
と、お尋ね下されたので、「丹波市へ行って買うて参ります。」と申し上げたところ、

「そんな事しては遅うなるから、わしが括ってあげよう。」

と、仰せられ、座布団の下から紙を出し、大きい小さいを構わず、墨のつかぬ紙をよりぬき、御自身でお綴じ下されて、

「さあ、わしが読んでやるから、これへお書きよ。」

とて、お読み下された。りんは、筆を執つて書かせて頂いたが、これは、おふでさき第四号で、今も大小揃いの紙でお綴じ下されたまま保存させて頂いている、という。

一〇四 信心はな

明治十五年九月中旬(陰曆八月上旬)富田伝次郎(註、当時四十三才)は、

当時十五才の長男米太郎が、胃病再発して、命も危ないということになった時、和田崎町の先輩達によって、親神様にお願ひしてもらい、三日の間にふしぎなたすけを頂いた。そのお札に、生母の藤村じゅん(註、当時七十六才)

を伴って、初めておちば帰りをさせて頂いた。

やがて、取次に導かれて、教祖にお目通りしたところ、教祖は、

「あんた、どこから詣りなはった。」と、仰せられた。それで、「私は、兵庫から詣りました。」と、申し上げると、教祖は、

「さよか。兵庫なら遠い所、よう詣りなはったなあ。」

と、仰せ下され、次いで、

「あんた、家業は何をなさる。」と、お尋ねになった。それで、「はい、私は蒔莠屋をしております。」と、お答えした。すると、教祖は、

「蒔莠屋さんなら、商人やな。商人なら、高う買うて安う売りははれや。」

と、仰せになった。そして、尚つづいて、

「神さんの信心はな、神さんを、産んでくれた親と同んなじように思いなはれや。そしたら、ほんまの信心が出来ますで。」

と、お教え下された。

ところが、どう考えても、「高う買うて、安う売る。」という意味が分からない。そんな事をする、損をして、商売が出来ないように思われる。それで、当時お屋敷に居られた先輩に尋ねたところ、先輩から、「問屋から品物

を仕入れる時には、問屋を倒さんよう、泣かさんよう、比較的高う買ってやるのや。それを、今度お客さんに売る時には、利を低うして、比較的安く売って上げるのや。そうすると、問屋も立ち、お客も喜ぶ。その理で、自分の店も立つ。これは、決して戻りを喰うて損する事のない、共に栄える理である。」と、諭されて、初めて、「成る程。」と得心がいった。

この時、お息紙とハツタイ粉の御供を頂いてもどつたが、それを生母藤村じゅんに頂かせて、じゅんは、それを三木町の生家へ持ちかえったところ、それによって、ふしぎなたすけが相次いであらわれ、道は、播州一帯に一層広く伸びて行った。

一六五 高う買うて

明治十八年夏、真明組で、お話に感銘して入信した宮田善蔵は、その後いくばくもなく、今川聖次郎の案内でわざわざへ帰り、教祖にお目通りさせて頂いた。当時、善蔵は三十一才、大阪船場の塩町通で足袋商を営んでいた。

教祖は、結構なお言葉を諄々とお聞かせ下された。が、入信早々ではあり、身上にふしぎなたすけをお見せ頂いた、という訳でもない善蔵は、初めは、世間話でも聞くような調子で、キセルを手にして煙草を吸いながら聞いてい

たが、いつの間にかやらキセルを置き、畳に手を滑らせ、気のついた時には平伏していた。が、この時賜わったお言葉の中で、

「商売人はなあ、高う買うて、安く売るのがやで。」

というお言葉だけが、耳に残った。善蔵には、その意味合いが、一寸も分からなかった。そして思った。「そんな事をしたら、飯の喰いはぐれやないか。百姓の事は御存知でも、商売のことは一向お分かりでない。」と思いつながら、家路をたどった。

近所に住む今川とも分かれ、家の敷居を跨ぐや否や、激しい上げ下だしとなつて来た。早速、医者を呼んで手当てをしたが、効能はない。そこで、今川の連絡で、真明組講元の井筒梅治郎に来てもらった。井筒は、宮田の枕もとへ行つて、「おぢばへ初めて帰つて、何か不足したのではないか。」と、問うた。それで、宮田は、教祖のお言葉の意味が、納得出来ない由を告げた。

すると、井筒は、「神様の仰っしゃるものは、他よりも高う仕入れて問屋を喜ばせ、安く売って顧客を喜ばせ、自分は薄口銭に満足して通るのが商売の道や、と、諭されたのや。」と、説き諭した。善蔵は、これを聞いて初めて、成る程と得心した。と共に、たとい暫くの間でも心に不足したことを、深く

お詫びした。そうするうちに、上げ下だしは、いつの間にかやら止まってしまひ、ふしぎなたすけを頂いた。

一四六 御苦勞さん

明治十七年春、佐治登喜治良は、当時二十三才であつたが、大阪鎮台の歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊に入隊中、大和地方へ行軍して、奈良市今御門町の榎屋という旅館に宿営した。

この時、宿の離れに人の出入りがあり、宿の亭主から、「あのお方が、庄屋敷の生神様や。」とて、赤衣を召された教祖を指し示して教えられ、お道の話が聞かされた。

やがて教祖が、登喜治良の立っている直ぐ傍をお通りになつた時、佐治は言い知れぬ感動に打たれて、丁重に頭を下げて御辞儀したところ、教祖は、静かに会釈を返され、

「御苦勞さん。」

と、お声をかけて下された。

佐治は、教祖を拝した瞬間、得も言われぬ崇高な念に打たれ、お声を聞いた一瞬、神々しい中にも慕わしく懐かしく、ついて行きたいような気がした。後年、佐治が、いつも人々に語っていた話に、「私は、その時、このお道を通る心を定めた。事情の悩みも身上の患いもないのに、入信したのは、全くその時の深い感銘からである。」と。



過去問題を熱心に演習する受験生

**天理高校2部受験生**  
**学習指導 実施**  
2月19日 大教会  
学生担当委員会

笠岡学生担当委員会(上原繁次委員長)は、2月19日、天理高校2部受験生の学習指導を大教会で実施した。今回は、受験生3名が参加。学担委員2名が数学、英語の過去問題の解説をし、受験生らはメモをとりながら、演習に励んだ。尚、天理高校1部受験生話取りは、今回受験生がおらず、未実施となった。

直轄委員部長・  
委員研修会開催  
婦人会

去る、3月3日、婦人会笠岡支部(上原きよ枝支部長)は、支部としての動き、また方向性を確認するため、直轄委員部長・委員研修会を開催しました。開講後、支部長様・大教会奥様を芯に、坐りづとめをつとめ、場所を移し、

支部長様より、婦人会長様の思いと、今、自分たちのやるべきこと、そして、支部としての動きについて、お話しいただきました。休憩をはさみ、上原順子委員による、言葉遣いについてのレクチャー、芳井・佐藤和代委員部長、葦陽・笹尾一美前委員部長、2名による感話、おわりの言葉をもつての研修会となりました。コロナ禍にあり、1日の予定であつ



研修会の風景

大教会だより

◎教人資格講習会修了者

立教185年3月13日終講  
上川邊 友 井 正 人

※お詫びと訂正

本年1月21日発行の『かさおか第61巻 第1号』4ページに掲載の「本部食堂ひのきしん」の記事で、期間を「立教184年12月5日〜15日」と記載しておりましたが「立教185年1月5日〜15日」に訂正します。  
読者ならびに関係者の皆様にご迷惑

をお掛けしましたことをお詫びするとともに、ここに訂正させて頂きます。

訃報

藤本基喜氏

恵陽分教会長  
3月8日出直されました。  
享年 75才

中村邦義氏

大教会幹部承事  
(元)油木分教会長  
3月14日出直されました。  
享年 86才



博多のお土産として有名な辛子(からし)明太子(めんたい)がある。明太子とたらこはどう違うのかと調べたら、「明太子はスケトウダラの韓国語名『明太(ミョンテ)』の子だから『明太子』。『たらこ』はタラの子だから『たらこ』と名付けられました。」と、すなわちどちらも同じ。この明太子を炊き立てのご飯に乗せてハフハフといただく。これって幸せの一つですよ。さて、明太子「MENTAIKO」をアメリカでも販売しようとした人がいた。しか

し、魚卵は気持ち悪いとなかなか売れず、悪戦苦闘。ところが、ある名前に変えたら爆発的に売れ出したとか。この続きは次回でと書きたいところですが、次回の「よりみち」担当は数か月先。筆者も忘れそう。そこで、答えを明かします。ジャジャーン！それは「スパイシー・ハカタ・キャビア」。キャビアはあの高級な世界三大珍味の一つでチョウザメの卵、なるほどね。このようにネーミング一つで全く印象が変わり異文化の人たちにも受け入れられるのですね。何かに応用できないかなあ。ところで、「イクラ」ってロシア語で「魚卵」を表すって、ご存じでした？  
(V)

